

東日本大震災を機に、苦しみや悲しみに直面した人の心をケアするため、宗教の壁を越えた「臨床宗教師」が、医療現場で活動を始めている。岐阜県や福井県の医院では、被災地で研修を受けた僧侶が在宅医療スタッフに採用し、終末期に備える患者や家族らに寄り添っている。(山本真嗣)

### 終末期を考える

臨床宗教師 布教・伝道を目指す。被災地や医療現場など公共的な場所で宗教、宗派に関係なく心のケアをする宗教者の総称として、東北の医師や宗教者が命名。患者や家族の病気を、死への不安の傾聴が基本で、求めがあれば祈りや読経をして、宗教的な質問に答える。

# 「臨床宗教師」スタッフに

## 患者の心の声聴き寄り添う



キリスト教徒の患者の話を聞く臨床宗教師の僧侶・田中至道さん。岐阜県大垣市で

「いつ命が絶えるかは分からないけど、精いっぱい生き、そのときが来たら仏様にお任せすればいい」。岐阜県大垣市の一軒家。近くの沼口医院から来た僧侶の田中至道さん(26)が、脳梗塞を患う独居の女性患者へ心で語りかけると、女性には笑顔でうなずいた。

田中さんは岐阜市の浄土真宗本願寺派・浄慶寺の僧侶。午前中に寺の勤めを終え、午後は沼口医院で臨床宗教師として働き、在宅患者を回る。女性には別宗派だが、田中さんは週三回ほど訪れ、一時間ほど話を傾けて仏壇にお経もあげる。女性は一こゝんにお坊さんに話を聞いてもらえたこととほなかつた。夫を肺がんがんで亡くし、自らも大腸がんを患ったこともあり、死への恐怖を抱え、生きてきた。だが、田中さんと話すうちに「行く所は仏様の所に決まっている。くよくよせず、一日を明るく暮らそう」と思うようになった。田中さんの訪問先にはキ

## 在宅医療の質を向上

リスト教徒の患者も。求められれば聖書も読む。「死生観は個人で違う。傾聴することで本人や家族が考えを整理し、穏やかに生を全うする道しるべになれば」。僧侶でもある沼口医院の沼口諭院長(53)によると、以前は先祖の月命日などに僧侶が檀家を訪れた際に悩みを聞く「よろず相談」のような役割を担ってきた。だが、核家族化や寺とのつながりが薄れ、十分に機能しなくなっている。

「死について相談できる宗教者がいることで、在宅医療の質を高められる」と沼口さん。国が進める、住み慣れた地域で最期を迎えるための「地域包括ケア」を支える専門職として、宗教者が必要と主張する。

福井市の「オレンジホームケアクリニック」でも、僧侶の木下克俊さん(40)が、臨床宗教師として患者宅を回っている。

東北大学大学院に養成講座があり、沼口医院は昨年から実習先として人材育成に協力。中部地方では、三重県の松阪市民病院緩和ケア病棟も今年から実習先となった。養成講座の准教授で僧侶の谷山洋三さん(46)は「医師や看護スタッフのストレス軽減にもつながる」と話す。

修了者は半数が被災者支援、二割が医療、福祉関係のボランティア。田中さんや木下さんのように仕事として働く臨床宗教師はまだ少数だ。普及に向け、沼口さんは継続的に働ける場が

### 震災を機に養成講座

臨床宗教師は、東日本大震災で被災者をケアした医師らが「安らかな終末期の環境づくりの助けに」と提唱。地元宗教界の寄付で二〇一二年、東北大学大学院に養成講座「実践宗教学」が設置された。これまで全国の宗教者七十六人が受講。今春から龍谷大学大学院(京都市)も養成プログラムを開設した。

谷山さんによると、受講生は僧侶や牧師、神主ら宗教者に限る。プログラムは「教え、導く」ではなく、相手に寄り添って耳を傾ける姿勢と、

高い公共性を身に付けるのが目的。布教を目的とせずに入々と接する方法や、病院など公的施設での振る舞い方などを学ぶ。仮設住宅での被災者の傾聴実習などもあるが、最も特徴的なのは他宗教との学び合い。受講生が順番に朝夕の祈りを担当し、僧侶が聖書の言葉を、牧師が経を唱える。

田中さんは「宗教は違ってても、目の前で苦悩する人に寄り添う気持ちは同じだと感じました」と話す。



被災地で祈りをささげる僧侶や牧師、イスラム教徒ら。2012年10月、宮城県石巻市で(東北大提供)

必要と考えており、沼口医院に本部を置き、情報交換などで支援する一般社団法人を二十九日に設立した。養成講座の運営委員で、牧師の川上直哉さん(40)は「震災では多くの犠牲者があり、死が身近になった。超高齢化の日本では遠からず、多死の時代を迎える。宗教者は一層公共的な役割が求められる」と話す。